

沖縄への冷静な視線 屋良健一郎

今年の夏、沖縄県内の詩人の会合で新城貞夫と初めて会った。一九三八年に生まれ、五〇年代末に作歌を開始したこの歌人は、リアリズムが主流の沖縄で前衛短歌の影響を受けた作品を発表してきた（それゆえ、沖縄ではきちんと評価されていない）。

・燭台に青き焰ら揺らめきて地下墓所に暗き謀議をはかる

『夏・暗い戻が……』（一九六三年）

沖縄であることを示す地名・語句や方言を用いず、むしろ異国との雰囲気を醸し出す新城の作品は、沖縄短歌史で異彩を放つている。そんな彼の新著『ささ、一献火酒を』（洪水企画）がシリーズ「詩人の遠征」の一冊として刊行された。歌集（近作ではなく一九七〇年代の作品）、散文、インタビューから成る一冊だ。

本書の圧巻は、散文「篡奪の帝国へのメッセージ」であろう。一九七二年に原案を書いて以来、加筆・訂正を加えて原型を留めていないというが、新城の短歌を考える上で重要な文章である。そこで書かれているのは、沖縄を翻弄してきた「帝国」への決別であり、その「帝国」への復帰を推進し、「帝国」からの「牡丹餅」（海洋博）に飛びついた「ヤラ」を始めとする沖縄の指導者への批判であり、彼らを支持した人々への諦めである。そもそも、本書のタイトル『ささ、一献火酒を』も、この散文中の「オキナワは祭りの島である。ささ、一献、泡盛を。もう立ち止まり得ず、

ひき返しようもない。後の祭りである」という箇所から採られている。本書収録の歌集のタイトル「間歇泉」も、復帰や基地問題に対する沖縄県民の言動を作者なりに捉えたものだろう（間歇（欠）泉とは、一定周期で噴き出す温泉のこと）。

散文「篡奪の帝国へのメッセージ」からは新城の沖縄への想いの深さと大衆運動への冷静な視線が感じられる。それを踏まえて読むと、明確に沖縄を示す語の出てこない新城の短歌に、郷土沖縄への想いが表出していることが、改めて感じられる。

・北さして帰りゆく雁、落ちざればかれら健やかな群れにすぎざる
『間歇泉』（『ささ、一献火酒を』所収）

・海ゆかば水漬く屍、くやしくもわがみなづきに言葉失せたり
『花明り』（一九七九年）

・国家へと群れ雪崩なす外側を歩みつぞわが天に睡しぬ

一首目、「北」は新城が「帝国」と呼ぶ日本である。本来であれば、日本へ帰ることを苦悩し、立ち止まるべき人々が復帰へと進んでいったことを雁の習性と重ね、「健やかな群れ」（批判的な思考を持たない無邪気な集団）と揶揄する。二首目と三首目の初出は一九七〇年。一九六八年には即時復帰を唱える屋良朝苗が行政主席に当選し、沖縄返還に向けての動きが本格化していた時期の作。「みなづき」は、沖縄戦における日本軍の組織的抵抗が終結した月。戦争の犠牲者を悼むと共に、悲劇をもたらした「国家」へ帰ろうとする復帰派を蔑視する。いずれの歌も、沖縄を直接詠むのではなく、読み手が沖縄と読むと解釈できる作りだ。

『ささ、一献火酒を』は、新城作品の読みを助けるとともに、沖縄をどう詠むかを考える上でも極めて示唆に富む一冊である。